

江戸遺跡研究会第89回例会は、2003年3月20日(木)午後6時30分より江戸東京博物館会議室にて行われ、朽木 量氏より、以下の内容が報告されました。

近世墓標の考古学的分析からみた江戸近郊の寺院

～平塚市大神真芳寺墓地の事例から～

朽木 量

(慶応義塾大学講師)

1近世墓標の資料的価値と墓標研究の広がり

墓標についての考古学的研究では、墓標の形態変遷を中心に、石材、寸法、戒名の数や記載法などについて分析してきた。こうした墓標研究は、他の考古遺物の研究に比して以下の二点で大きく特徴付けられる。即ち、紀年銘や他の銘文を持つ文字資料としての側面を持つ点と、悉皆調査による大量のデータによりその傾向を指摘できる点である。紀年銘を分析することにより経時的変遷の把握が可能となり、悉皆調査を行うことでその経時的変遷を量的に把握することが可能となる。また、銘文等の文字情報は、モノとしての墓標から読み取れる形態や材質、寸法といった情報に加えて、戒名の格や被葬者の数、墓標の造立主旨など多くのことを伝えてくれる。墓標という資料がこれらの特徴を持っていることは、文献史学や民俗学の成果との照合が不可欠である歴史考古学において、年代決定が容易な極めて恵まれた資料であるといえる。以上に述べた墓標の資料的価値が、墓標は古くから注目されてきた。近世墓標について最も早く言及したのは黒川真頼で、慶長年間(1596～1614)に寺請制により墓標を立てる風習が一般化したこと、安永年間(1772～1780)に「方石」を用いて墓標を立てることが一般化したことなどを指摘した(黒川1878)。その後、平子鐸嶺が「本邦墳墓の沿革」で角柱状の墓標の起源を位牌にもとめている(平子1923)。しかし、これらの研究は、墓地全体を概観した印象で語られていて、個別の墓標についての観察も十分に行われておらず、厳密な意味で考古学的調査とは言い難いが、墓標の起源や寺請制との関連性に言及した点で興味深い。一方、特定の墓地における悉皆調査に基づく考古学的研究は坪井良平による京都府の山城木津惣墓の研究に始まる(坪井1939)。坪井は3305基の悉皆調査を行ない、悉皆調査という方法論や分類法、調査項目の設定等の点でその後の墓標研究の方向を定めたといえる。しかし、悉皆調査にかかる労力が膨大であるためか、その後の墓標研究の事例は決して多くない。1980年代頃から研究事例が増えはじめ、調査地域も関東を中心に全国に広がりつつある。それに伴い、取り扱われる研究課題も多様になり、研究者間の相互交流を深める場として「墓標研究会」が2001年に

発足した。

特に最近の墓標研究では近世考古学の発展と相まって、地域史の中での墓標の位置づけや、都市と村落の関係性の中で墓標を捉え直そうという動きが高まっている。例えば、谷川章雄は離島や僻村の墓標から近世墓標の普及を論じている（谷川2002）。一方、関口慶久による牛込神楽坂周辺、時津裕子による筑前秋月、滝沢誠らによる沼津など城下町での調査事例も増えつつある（関口2000、時津1998、沼津市教育委員会2002）。筆者もまた、京都府南山城地域において微細な地域的な差異を通じて、地域における石材流通のあり方を論じてきた（朽木1994、1996、2000、2002）。しかしながら、そうした地域史的枠組みの中で墓標を論じる際に、墓地の成立の仕方や墓地の社会的機能による墓標のあり方の違いには余り注意が払われてこなかったように思われる。すなわち、これまでの墓標研究では村の共同墓地に立つ墓標と、寺院に付属する墓地に立つ墓標、家毎の墓地に立つ墓標を余り区別せず、比較してきた。しかし、墓標研究は墓地ごとに悉皆調査し地域的傾向を指摘するのが一般的であり、被葬者が村という行政的単位に強く影響される共同墓地と、地域的に広がりを持つ寺院付属の墓地では、墓標のあり方に違いが生じるのではないだろうか。そこで、本発表では江戸近郊の寺院とそれに付属する墓地を取り上げ、当該地域における寺院の役割を踏まえつつ、寺院付属墓地における墓標のあり方を考察する糸口としたい。

2. 真芳寺と付属する墓地の成立

本発表では、平塚市北部で厚木市、伊勢原市に隣接する大神にある真芳寺墓地を扱う（図1）。真芳寺は曹洞宗系単立寺院で、寺伝では文明十（1478）年に後北条氏支族により創建したとされる。同寺墓地には147の家毎の区画と2つの無縁墓碑群（現在は1つ）があり、1900年までの墓標を対象として悉皆調査した結果、365基の墓標が確認できた。同寺墓地で最も古い墓標は慶安三（1650）年銘を持ち、17世紀末以降墓標造立が恒常化する。創建年や後述する過去帳の記載開始年と比べて墓標の初現年が遅れるものの、これは関東での他墓地における傾向と一致している。また、同墓地でのその後の造立数の変遷からみても平均的な関東の寺院墓地といえる。

墓標の形態変遷については江戸でよく見られる板碑型墓標類に始まり、肩部に稜角をもつ舟形墓標や仏像を半肉彫した有像舟形墓標、頭部が弧状を呈する櫛形墓標、台状の盛上りを有する台状頭角柱墓標へと変化する（図2・3）。筆者が以前に独自調査した藤沢市遠藤周辺の墓標や、厚木市での調査（厚木市教育委員会1996、1997）と比しても大きな差異はない。石材は8割強が火山礫凝灰岩、残りが多孔質安山岩である。

墓標研究に並行して過去帳の分析も行った。同寺には寛永三（1626）年以降現在までの過去帳がある。このうち、1870年代までを対象として分析を行ったところ、1817名分の記載が確認できた。過去帳に記載された故人の居住地を見ると、寺院が所在する大神村を中心に、戸田、小稲葉、長沼、田村、津古久など近隣諸村をはじめ、遠くは伊勢原、厚木、杉久保、海老名本郷、寒川宮山など極めて広い範囲に亙ることが分かった（図1）。このことから、真芳寺が当該地域の中核的寺院とし

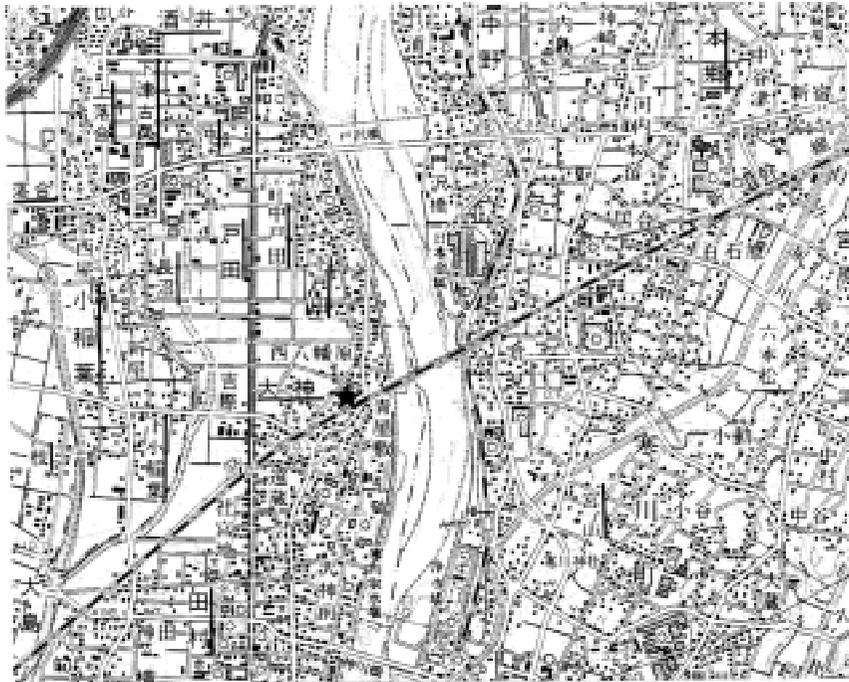


図1 大神真芳寺位置(★印)と過去帳記載の檀家がいる村(線引部)
 国土地理院5万分1地形図「藤沢」を改変

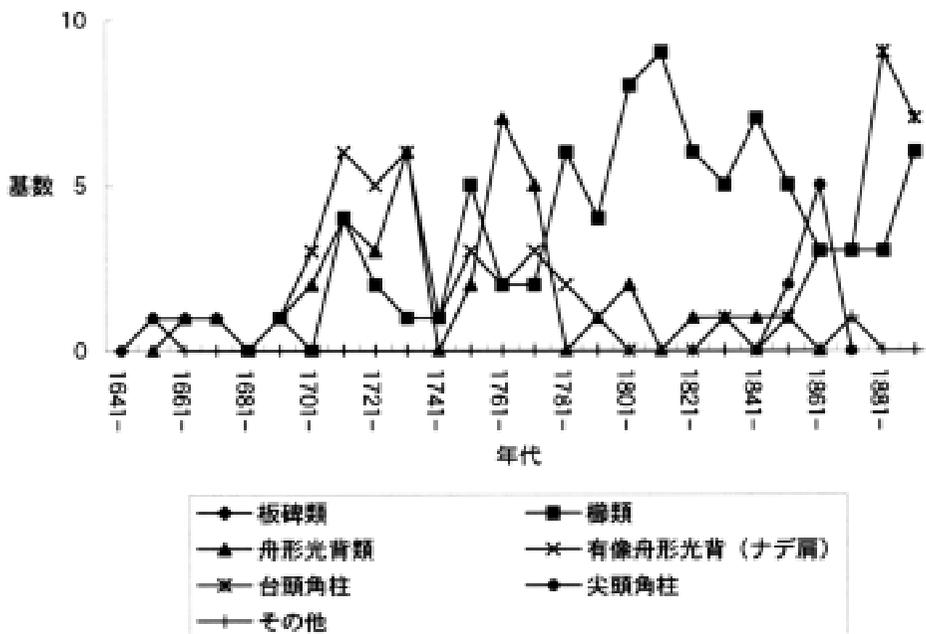


図2 真芳寺年代別主要墓標形式の推移

て機能していたことが指摘できる。更に、寺建立当初は寺の所在する大神村よりも近隣諸村の檀家が多いのに対し、17世紀後半から次第に大神村の被葬者が多くなり、村の寺院としての位置づけが確立していくと考えられる。

3. 墓地・墓標から見た江戸近郊の寺院

被葬者の戒名の格に注目して、墓標調査の結果と過去帳の分析を対照させると真芳寺における墓地の果たす役割は更に明確となる。即ち、過去帳においては信士信女の位階を持つ物故者と禅定門禅定尼を持つ物故者はほぼ同じ200余名づつに対し、居士大姉や院号居士大姉の位階を持つものは合わせてその半数が記載されている。一方、墓標では戒名の位階の中位に位置する信士信女の位階を持つものが最も多く、それより下位の禅定門禅定尼のものはその半数、更に下位の禅門禅尼は極めて少ない。逆に、信士信女より上位にあたる居士大姉のものも極めて少ない。また、過去帳に記載されているにもかかわらず真芳寺墓地に墓標の無い物故者（過去帳記載1817名中1594名）が多い理由としては次の二つが考えられる。1)寺院付属墓地以外に家単位の個別墓地を持つ家があること。そうした墓地は真芳寺檀家の場合、旧家に多く、概ね18世紀前葉から成立したと考えられる。2)禅定門禅定尼・禅門禅尼など、一般に信士信女より低い位階の戒名を持つ物故者は必ずしも石製墓標を建てなかった可能性があること。いずれにせよ、これらのことから真芳寺墓地は檀家全体の中で限られた階層の墓標により構成されているといえる。

以上の分析により、真芳寺は、当該寺院の所在する大神村だけでなく近隣諸村の中核的寺院として機能し、寺院付属墓地も近隣諸村の檀家により構成されていることが指摘できる。さらに、檀信徒全体の中でも中位に位置する信士信女の位階を持つ被葬者が多く、戒名の格を社会的階層に置き換えて解釈した場合、限られた階層の墓地として機能していたことが分かる。これまでの墓標研究では村の共同墓地や寺院付属墓地、家単位の個別墓地の墓標を余り区別せず地域的差異を論じてきたが、真芳寺の事例を見るかぎり、村の共同墓地が村全体の状況を強く反映するのに対し、寺院付属墓地は当該寺院の地域的社会的位置づけ・役割に影響されながら成立しているようである。今後の墓標研究はこうした側面に配慮しながら、地域史全体の中で墓標を解釈していくべきである。そうした中で墓標研究が更に発展し、近世考古学においては近世地域社会の復元に資するものとなることを期待したい。

付記 本発表は『平塚市史』寺院編にかかわる墓地調査の成果に基づいている。本発表の基礎となった墓標悉皆調査の詳細なデータは近日中に平塚市史関連資料として刊行される予定である。また、現地調査及び一部成果の公開にあたって真芳寺、平塚市博物館、市史編纂委員会の諸氏のお世話になった。記して、感謝申上げる次第である。

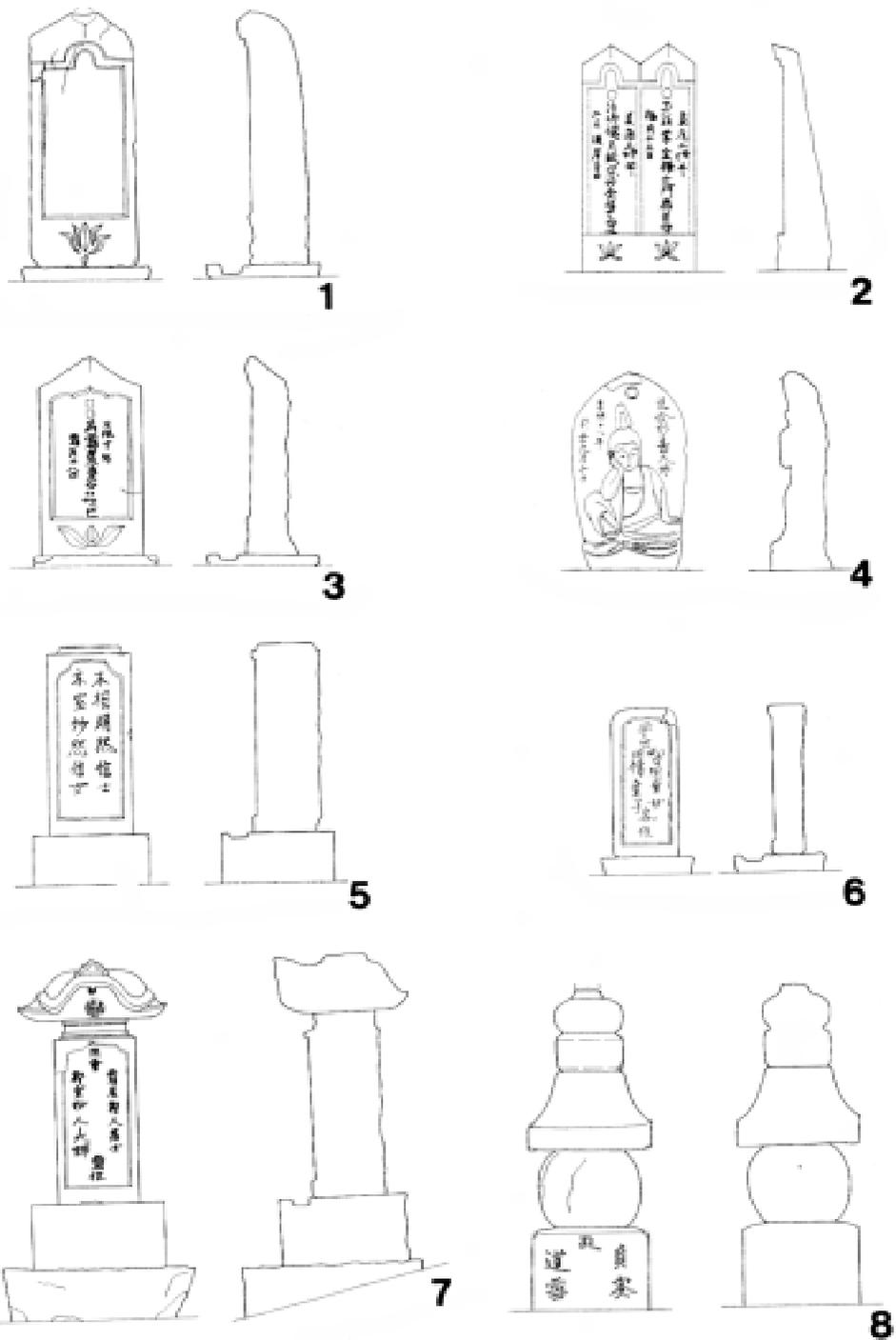


図3 主要墓標形式の実測図 (1/20)

- 1 : 板碑形 2 : 双体板碑形 3 : 舟形 4 : 有像舟形
 5 : 台状頭角柱 6 : 櫛形 7 : 笠付塔婆 8 : 五輪塔

【参考文献】

- 厚木市教育委員会1996 『最勝寺墓石調査報告書』厚木市教育委員会
- 厚木市教育委員会1997 『長福寺墓石調査報告書』厚木市教育委員会
- 朽木 量1994 「近世墓標の形態変化と石材流通」『民族考古』2 63-84頁
- 朽木 量1996 「近世墓標とその地域的・社会的背景」『史学』66-1 91-110頁
- 朽木 量2000 「墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動 奈良在地産石材の消長と南山城
における墓標の地域的差異」『史学』69巻3・4号 259-282頁
- 朽木 量2002 「近世墓標からみた京都府南山城地域の社会的繋がり」『帝京大学山梨考古学研究所
研究報告』10 131-145頁
- 黒川真頼1878 『増訂工芸志料』1974年再版 平凡社
- 関口慶久2000 「御府内における近世墓標の一樣相～東京都・牛込神楽坂周辺寺院群の墓標調査から
～」『立正考古』38・39 51-84頁
- 谷川章雄2002 「近世墓標の普及をめぐる」『墓標研究会会報』7 1-8頁
- 時津裕子1998 「近世以降の墳墓の型式学的研究 筑前秋月城下を中心として」『人類史研究』10
74-96頁
- 沼津市教育委員会2002 『上香貫靈山寺の近世墓』沼津市教育委員会
- 平子鐸嶺1923 「本邦墳墓の沿革」『佛教藝術の研究』国書刊行会 所収

学会・研究会情報

日本考古学協会第69回総会

期 日：2003年5月24日（土）・25日（日）

会 場：日本大学文理学部（〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40）

京王線 下高井戸駅下車 徒歩10分

主 催：日本考古学協会・日本考古学協会第69回総会実行委員会

事務局：日本考古学協会第69回総会実行委員会 日本大学文理学部史学研究室

TEL 03-5317-9703

近世関連研究発表（25日）

第2会場：日本大学文理学部4号館2階421教室

13時55分～14時20分

小倉徹也・田中清美・宮本佐知子・小田木富慈美「豊臣期（1580～1615年）の達磨窯の調査」

14時20分～14時45分

千葉 豊・富井 眞・清水芳裕・R.ウィルソン「京都大学病院構内遺跡出土の乾山焼関連資料」

14時45分～15時10分

石神裕之「近世庚申塔の型式と地域的変遷 - 東京都23区の事例を中心として - 」

15時20分～15時45分

関根達人「アイヌ墓の副葬品に関する考古学的検討 - 民族誌との比較 - 」

15時45分～16時10分

角南聡一郎「蹄鉄の民俗考古学的研究 - 遺跡出土資料と民俗資料の統合に向けて - 」

16時10分～16時35分

須田英一・桜井準也ほか「漁村の考古学 - 三浦半島における近現代貝塚の調査 - 」

第3会場：日本大学文理学部4号館2階422教室

13時30分～13時55分

小林 克・堀内秀樹「オランダ国内諸都市出土の日本製品」

第5回四国城下町研究会「四国と周辺の土器 - 火鉢と焜炉類にみる流通と生活形態 - 」

期 日：2003年7月19日（土）12:30～20日（日）16:00

会 場：高知女子大学（高知市永国寺町5-15）

JR高知駅 徒歩15分

主 催：四国城下町研究会

問合せ：日下正剛（070-5187-4636）・浜田恵子（090-5915-5431）

研究発表

19日（土）

- ・小林謙一「近世瓦質土師質焜炉類の生産・流通と使用 - 東日本を中心に - 」
- ・日下正剛「問題提起・徳島」
- ・浜田恵子「流通・高知」
- ・松本和彦「香川」
- ・柏本朝子「山口」

20日（日）

- ・吉田 寛「九州東部」
- ・能芝 勉「京都」
- ・小川 望「民俗例」
- ・小泉和子「台所道具の歴史」
- ・岩井宏實「竈の機能を補う火の道具」
- ・島崎とみ子「近世の料理と調理具」

第90回例会のご案内

日 時：2003年5月15日（木）18:30～

内 容：水山 昭宏氏

「南千住回向院別寮埋葬地の調査報告」

会 場：江戸東京博物館 第2学習室

（大階段北側の通路を東に進み、駐車場の脇を直進し、左側の夜間入口より入る）

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）
A4出口 徒歩1分

問合せ：江戸東京博物館

03-3626-9916（小林）

東京大学埋蔵文化財調査室

03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



会費（通信費）納入のお願い

以下の方々は、会費（通信費）が3年間（2000～2002年）未納となっています。至急、郵便振替にて送金下さるようお願い申し上げます。次回会報発送までに納金のない方は退会とみなします。他の会員の方には、次回会報発送時に振替用紙を同封します。

秋元智也子・池沢なるみ・大村浩司・小澤かおる・金子佳史・小林泉・小宮山圭造・佐々木達夫・篠宮欣子・島村範久・高橋健太郎・武田浩司・中村裕二・降矢順子・細川 義馬淵和雄・森 達也・柳原和弘・吉田敬治・吉田 寛（敬称略）

【編集後記】

第90号をお届けします。

7月の例会は、恒例になりました「特別例会」で、19日（土）に開催します。例年と同様、普段の例会では時間的制約から聴くことのできない関東近郊の調査研究成果を3本予定しています。